



当館は奈良の文化・歴史

ホテルのこだわり

「歴史と現在をつなげる」石

御影石

1F
エント
ランス



エントランスには「御影石」を使用。

御影石とは花崗岩の別名で、地球のマグマが地下深くでゆっくり冷却され、地中の高い圧力によって形成された岩石です。

奈良県明日香村にある古墳時代後期の古墳【石舞台古墳】に使われているのもこの御影石。日本のお墓で最も多く使用されている石材でもあります。

名前の由来は、御影石の産地である兵庫県神戸市東灘区の御影という地区名で、映画化もされた「火垂るの墓」の舞台となった地域です。

729年から749年まで続いた元号である「天平」の時代は、奈良時代を代表する存在《聖武天皇》の時代と重なり、ある種の「最盛期」とも言える時期でした。また、「奈良時代全体」の文化を広く「天平文化」と呼ばれるケースも多くあります。エントランスでは、「飛鳥時代から奈良時代」「藤原京から平城京」への移り変わりが表現されています。

当ホテルに代々伝わる...



甲冑

東大寺の大仏と同じ作り方、1つ1つの中身は和紙でできているそう。少なくとも明治あたりからあるものといわれていますが、詳細は明かされていおりません。



屏風

本物の金箔が使われているそうです。

※茶室、猿沢池の絵も含め大変繊細で貴重な物となっております。手をふれないように宜しくお願いいたします。

未来へと繋げたい 奈良の「紡織技術」

その質の高さ、白の美しさから「麻の最上」と評された織物が奈良にあります。江戸時代に幕府御用品として栄華を極めた、高級麻織物「奈良晒(ならざらし)」。

麻の生平(きびら)を晒して純白にしたもので、主に武士の袴(かみしも。江戸時代の武士の礼服)や僧侶の法衣として用いられた。

また、千利休がかつて「茶巾は白くて新しいものがよい」と語ったことから、茶巾としての需要もあり、他にも古くから社寺でも重用され、宮内庁や伊勢神宮、神社庁などに献納されてきた歴史があります。

1979年(昭和54年)には無形文化財の指定を受けた奈良晒の紡織技術でしたが、麻を手で割くなど手間もかかり、衰退への道を歩み始めました。

「知る」ことから、「途絶えない未来」へと繋がることを祈った「奈良晒で作った茶室」を是非ご覧ください。



1F
ロビー



「大茶盛式」で有名な「西大寺」からお借りしている茶道具です。この「大茶盛式」は「民衆救済」の一貫として当時は高価な薬と認識されていた茶を民衆に施すという医療・福祉の実践という2つの意義によって、800年近く連綿と受け継がれてきました。



1200年の歴史を経て、同じ風景を感じる

1F
ギャラリー
入口手前

「猿沢の絵」

フェンディが世界の5人に選んだアーティスト、小川貴一郎氏による作品。

猿沢池は興福寺が行う「放生会」の放生池として、天平21年(749年)に造られた人工池で「万物の生命をいつくしみ、捕らえられた生き物を野に放つ」という想いが込められています。かつては興福寺の遊び場として、生活に身近な存在でもありました。

かつては興福寺の遊び場として、生活に身近な存在でもあり、特に興福寺五重塔が周囲の柳と一緒に水面に映る風景はとても美しく、「猿沢池月」は南都八景のひとつとなり人の心を惹きつけてきました。

そんな猿沢池ですが、感じられる景色や空は時代を超えても同じ。現在でも多くの人々が訪れる憩いの場となっています。



奈良の伝統工芸を 身近に使う

伝統工芸といえば「大切にしまう」「節目のお祝いにのみ使用」そんな家庭も多いのではないのでしょうか？当ホテルでは「伝統工芸」を使う、生活に取り入れる事でもっと身近に奈良の良さや文化を感じていただこうと考えています。

「和紙」のある暮らし

宇陀紙



- ・客室の五重塔を模した照明器具
- ・レストランの障子

越前和紙



- ・客室内シャワーブース
トイレの扉の赤い和紙

土佐和紙



- ・その他客室の
障子や壁紙など

宇陀紙(うだがみ)は、奈良県吉野郡吉野町で生産される和紙で「吉野和紙」のひとつ。楮(こうぞ)に白土を混ぜて漉く。もとは「国栖紙」と呼ばれていたものを、江戸時代に大和宇陀町の商人が全国に売り広めたことから、この名で呼ばれるようになりました。宇陀紙は厚手の紙で、丈夫なことで名高く、雨傘や書籍の表紙などに使用されていました。



和紙ではありませんが、レストランの天井は銀のもみ紙が使われています。元々天井が低かったこの場を広く見えるように奥に行くにつれて天井が上がる構造となっています。

赤膚焼と奈良絵の洗面台

各部屋にあります洗面台は赤膚焼。古瀬堯三さん(女性窯元)の作品となっております。



外側

外の面に描かれているのが「奈良絵」です。手前には姫の姿が見えます。奥の絵は扉が閉まっています。

内側

中の模様は「鹿背(かせ)」といって焼きの過程で偶然できるもの。この模様が出たら、上出来の証です。また、雲の絵が描かれており、雲マニアの中にはクラウドウォッチングのためだけに奈良に来る方もいらっしゃるほど有名だそうです。

赤膚焼

かつて都から、平城京の西方に赤茶けた山が望めたという。色の正体は鉄分を含んだ上質の赤土で焼き物に適した粘土でした。また、朱は魔除けにつながる聖なる色。沈む夕日のなか、赤い山肌はさらに燃えるように際立ち、神々しかったのかもしれません。その山の名は五条山、別名「赤膚山」と通称されることになり、諸説ありますが奈良市五条山一帯の丘陵で作られてきた焼き物を「赤膚焼」と呼んでいます。

奈良絵

室町時代の末期頃から江戸時代にかけて作られた、横本形式の絵草紙「奈良絵本」に描かれた絵を奈良絵と呼んでいます。構図も単純で明るい彩色の素朴な画風は釈迦の生涯(本生と仏伝)を描いた「過去現在因果経」をわかりやすく伝えるための絵解き「絵因果経」を手本に生まれたといわれています。現代では絵に宗教的な意味はない事が多く、心にすっと溶け込むやさしいタッチのみを残し、流用して、三笠山(御蓋山)や鹿、二月堂といった「奈良のモチーフ」を描くことで独自に発展してきたそうです。
※三笠山(御蓋山)・・・若草山と呼ばれ親しまれている山です



奈良絵



鹿背
この斑点が「鹿背」
お部屋によって異なります。

奈良の自然を 身近に感じる —

奈良といえばスギとヒノキ。奈良県は面積の77%を森林が占め、恵まれた自然環境の中で古くから優良木材の生産地として知られています。

吉野地域で生産されるスギ・ヒノキは、「吉野材」と呼ばれ、年輪幅が細かく均一で、密度が高いことから「強く」、奈良の木はまっすぐに成長するため木目が直線で「美しい」—— そのうえ、優しいイメージが奈良にぴったり合う日本を代表する良質な木材です。

「吉野杉」と「ヒノキ」を使う

吉野杉

- フロント ・テーブル
- フロント ・勾玉の形の休憩椅子
- フロント ・柱
- 客室 ・机
- 客室 ・バルコニー
- レストランジ ・テーブル



客室



フロント 柱、休憩椅子



※バルコニーの囲いには
“吉野塀”という作り方を取り入れています

テーブルや椅子など、少し色が濃くなっているのは、吉野杉を約半分にプレスして圧縮した物。この、圧縮は岐阜県飛騨市で加工して頂きました。

藤原京建立の時代から奈良の職人さんだけでは追いつかず、その際に岐阜県飛騨市の職人さんたちが手伝いに来てくれたという歴史があります。興福寺や東大寺など、奈良のお寺はほとんど助けてもらったようです。

その歴史に倣って、当ホテルでも奈良でとれた吉野杉を、一度飛騨市に送りプレス加工をしてもらいました。



ヒノキ

- レストランジ ・床

